



東西南北～  
文化情報・観光情報

# 茨城県陶芸美術館 「没後10年人間国宝 松井康成展」を聞く



茨城県陶芸美術館の外観



筑波総研株式会社

主席研究員 熊坂敏彦

茨城県笠間市にある茨城県陶芸美術館は、東日本初の陶芸専門美術館であり、入館者数は全国トップクラスにある。ここで、今年4月20日から6月16日まで、「没後10年人間国宝 松井康成展」が開催された。そして、同展は7月13日から9月23日まで東京のニューオータニ美術館で開催中である。これらの企画展を担当した茨城県陶芸美術館首席学芸主事の柳田高志氏より当美術館の特徴、企画展の経緯、松井康成の作風などを伺った（取材：平成25年7月18日）。

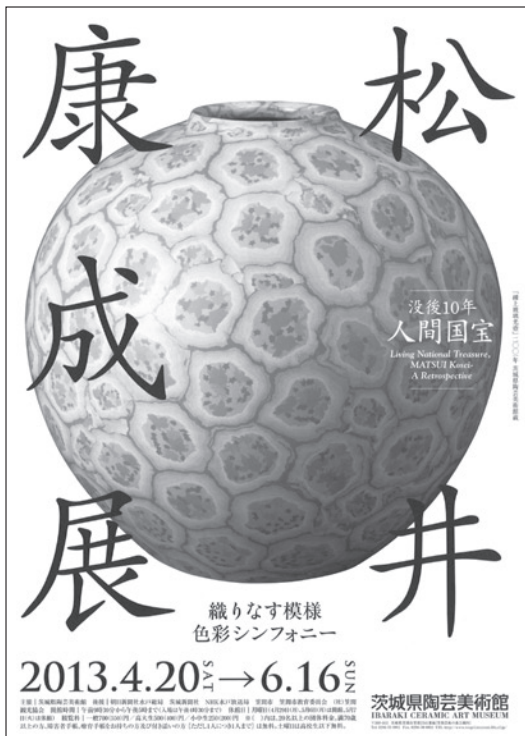
## 茨城県陶芸美術館の概要と特徴

茨城県陶芸美術館は、「伝統工芸と新しい造形美術」をテーマに、誰もが気軽に立寄れる親しみのある県立美術館として、平成12年4月、笠間芸術の森公園内に開館した。鉄筋コンクリート造り、地上2階、地下1階の建物は、建築面積2,443㎡、延床面積6,751㎡という規模で、展示室のほか、県民ギャラリー、多目的ホール、レストラン、ミュージアムショップ等が併設されている。展示室では、年間4回の企画展の他、近現代日本陶芸の巨匠たちというCollection展、茨城の陶芸といった常設展示が行われる。当館は、日本屈指の陶芸専門美術館であり、佐賀県、福井県、滋賀県、愛知県など陶磁器産地にある他の美術館に比べて入場者数や所蔵品数等において、トップクラスにある。

当館の所蔵品の特徴は、陶磁器の人間国宝35人全員の作品を所蔵していることである。そのうち地元茨城県内で唯一「陶芸」の人間国宝である松井康成の作品は、遺族の寄贈もあって306点も所蔵している。また、松井康成と並ぶ茨城の2大巨匠・板谷波山の作品も35点所蔵している。

## 美術館・学芸員の果たす役割

笠間焼産地は、益子焼産地と並んで関東の二大陶磁器地場産業の産地であるが、当館が同産地の魅力づくりや作家育成、観光集客などに果たしている役割は極めて大きい。その具体的な活動としては、①展示（地元作家の常設展や特別企画）、②データベース（作家ごとのデータベース構築）、③サロン機能（作家のネットワークづくり支援）、



松井康成展のポスター

④作品鑑賞（刺激、啓発）等があげられる。そして、そうした活動を推進しているのは、歴代著名な美術専門家である館長（現在は金子賢治氏）と6名の学芸員である。



首席学芸主事・柳田高志氏

首席学芸主事の柳田高志氏は、自らも絵画や陶芸の創作をする美術教師出身である。同氏に今回の企画展について伺った。「当館の学芸員としての私の仕事の内、展示関係は企画展年間1本、当館所蔵品中心のコレクション展年間1本、茨城県内作家展年間1本が主なものです。今回私が担当した企画展の『没後10年人間国宝 松井康成展』は、昨年の4月ごろから準備を始めました。松井康成の代表作や受賞作品をできるだけ多く見ていただくこと、松井康成の全ての技法を見ていただくこと、この2点を心掛けて企画いたしました。松井氏のご遺族や他の美術館や個人所蔵家のご協力を得て、103点の作品を展示することができました。これらの『作品』の中から『作家=人間』としての松井康成がどれだけ見えてくるか、『作品』の中に『作家』が見えてくるような『展示』を心掛けました。そのために、松井康成が生前残した著作を読み込んだり、作品を創った時の状況をご遺族や関係者からヒヤリングするなど準備をいたしました。そして、『作品』の展示構成を軸としながら、作家を語る上で重要な『解説』、『周辺資料』等の配置に留意して『展示』を仕上げました」と、その間の経緯を語られた。次に、同氏からお聞きしたことを中心に、松井康成の作品の特徴についてみてみよう。

### 人間国宝・松井康成の作品の特徴

松井康成は、昭和2年に長野県に生まれ、30歳で茨城県笠間市の月崇寺の住職となり、笠間で作陶生活に入った。初めのころは、中国や日本の古陶磁研究を行い、その後、種類の異なる土を組み合わせて

て使う「練上（ねりあげ）」の技法に絞って試行錯誤を重ね、独自の表現の世界を創造した。種類が異なる土を使うと収縮率等の違いから割れやすく、歩留まりも悪い。そこで、松井は土の粒子の研究を行い、基本となる土は同じものを使って、そこに少量でも鮮やかに発色する呈色剤を混ぜる「同根異色」という方法を開発し、「練上」表現の可能性を拡大した。この結果、平成5年に、この「練上手」により、重要無形文化財保持者に認定された。

松井康成の作品のいま一つの特徴は、ロクロの内側から膨らませ表面に亀裂を誘う「嘯裂（しょうれつ）」という技法である。通常の「練上」の作品は型作りによる皿や鉢が多いが、松井は筒型に立てた練上げ土をロクロの回転で内側から膨らませることにより球型の壺の成形に成功した。そして、松井康成の作風は、その後、多彩に展開し、晩年には磁器に近い土の組成と硬質な輝きを特徴とする「玻璃光（はりこう）」に至った。

練上技法の特殊性もあり、松井康成は、外からの弟子をとらなかった。しかし、柳田高志氏によれば、“陶芸展の現在”を俯瞰すると、松井康成の残した斬新な技法は、ますます洗練と進化を遂げて、多くの新進作家に受け継がれ、「練上」技法は、現代陶芸を語る上で欠かすことのできないものとなっている。現在当館で開催中の「第22回日本陶芸展」（7月13日から9月8日）入賞、入選作品からも多くの「練上」作品を見出すことができる。会期中に、是非当館に足をお運びいただきたい。また、既述の通り、「松井康成展」は、東京のホテルニューオータニガーデンコートロビー階のニューオータニ美術館でも開催中である。



松井康成展のポスター